はちまき こょう 八巻古窯群

在 地 知多郡東浦町緒川字八巻

(北緯34度58分18秒 東経136度55分3秒)

調査理由 街路改良工事3・3・2号名古屋半田線

調 査 期 間 平成22年4月~平成22年7月

調査面積 770㎡

担 当 者 池本正明・阿部敬・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「刈谷」)

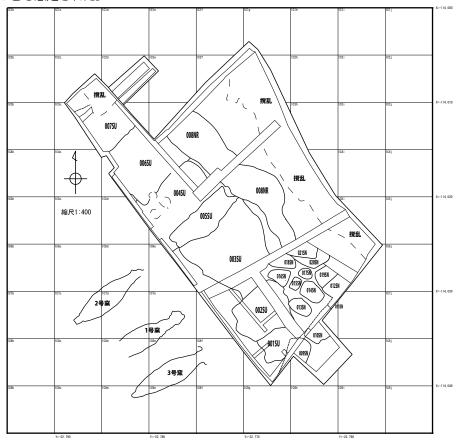
調査の経過

調査は、街路改良工事3・3・2号名古屋半田線建設に伴う事前調査として、愛知県建 設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施し た。

調査の概要

八巻古窯群は、標高 50m 前後の東西に延びる丘陵の頂上付近に位置し、北西方向に開 口する小支谷の北東斜面に位置する。

過去の八巻古窯群の調査は、昭和 36(1961) 年に愛知用水工事の事前調査として名古屋 大学考古学教室によって実施された(以下、S36調査)。今回の調査区は、S36調査区の 北東側にあたる。調査対象区内は南西から北東に向かって下る斜面とそれに続く平坦部 から成る。斜面部において八巻古窯群に伴う灰原を、平坦部では近世~近代と考えられ る水田跡や自然流路を検出した。出土遺物は中世陶器(いわゆる山茶碗)が多くを占め、 その内多くは碗、小碗・皿、焼台である。少数の短頸壷、片口鉢、広口瓶も確認されたが、 これらが出土したのは下位の灰層に限られるため、窯体・操業毎の焼成器種に偏りがあっ たことも想定された。



八巻古窯群10区調査区と遺構(1:400)

中世前期 の未確認 の窯体に 伴う灰

八巻古窯群に伴う灰原は、層位からおおよそ7つの灰層に分別できた。いずれの灰層 も中世陶器を大量に包含し、斜面の上位である南西から下位の北東方向に向かって堆積 している。灰層には遺構番号を付番した。層位および出土遺物から最も古相を示したのは 003SU である。出土遺物には輪花碗や高台の高い碗を多く含み、少数ながら短頸壷、片口鉢も含む傾向にある。一方新相を示すのは 006SU・0 07SU であり、無高台で底径 の小さな皿を含み、碗の底径は小型化しているものが多く見られた。

八巻古窯群の推定位置は、現況が変化し、詳細な位置については不明であったが、斜面上位に隣接する畑の所有者のご好意によって、窯体の一部が残存していることを確認できた。確認した窯体底面の位置関係は南が低く北が高い。そこでS36調査の結果に基き、南側の窯体を古窯群中最古の八巻1号窯、北側の窯体を八巻2号窯と推定した。これらの窯体と灰層の位置関係は、八巻1号窯の斜面下位に003SU、八巻2号窯の斜面下位に005SUが位置する。この窯体の新旧関係と今回の灰層の堆積状況にも矛盾はない。また、八巻3号窯は1号窯のさらに南に位置していたが、すでに滅失していた。

S36 調査において、「なお第二号窯の北に更に一基ある如くであったが今回の調査に於いては確認できなかった」と報告された未確認の窯に相当する灰層として、平面位置では 006SU・007SU が該当する。前述のように 006・007SU からは新相を示す遺物が出土しており、未確認の窯では最新の 2 号窯よりもさらに後に操業が行われていた可能性がある。

近世〜近代 近世〜近代の遺構としては水田跡 (009SN ~ 021SN) と自然流路 (008NR) を検出した。 水田は細かく区切った水田畦畔に区画されている。 (鈴木恵介)



八巻古窯群全景(中央上の畑地に1号・2号窯が残存)



006SU灰原検出状況



003SU遺物出土状況



003SU出土の輪花碗